

「からし種」の畑を耕す

現在の尚綱学院は、122年前にアメリカバプテスト教会の3人の女性宣教師によって開始された家塾「尚綱女学会」を源とします。わずか数名の女生徒から始まったこの家塾は、現代では男女共学の幼稚園から大学院までを擁する総合学園に発展してきました。「キリスト教精神に基づく教育の実践」は建学以来の不変の教育理念であり、目標です。最初は目立たなくても、日に日にその真価を発揮するような、地道に努力して地域の人々と社会のために仕事をする卒業生を送り出してきました。これまで122年に渡り、尚綱学院が発展的に持続してきたことは、その卒業生の働きが、企業、自治体、学校などの地域社会によって受け入れられ、評価されてきたからです。その意味で地域社会の皆様にご感謝するものです。同時に、「他者に寄り添い、他者と共に生きる」本学の教育理念を学び、それぞれが体得し、人々の役に立つ仕事と生き方を実践してきた本学院の多くの同窓生を称えたいと思います。

『新約聖書』ペトロの手紙一1:25には「しかし、主の言葉は永遠に変わることがない」これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです」と書かれています。これと同じように、これまで変わることなく継承されて来た建学の精神をなお一層強く掲げ、学院全体で共有し、これまでと同じように、人間性豊かな、他者に共感することができる、卒業生を送りだしていきたく強く願います。「からし種」は「どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる」(『新約聖書』マタイによる福音書13:32)と教えています。したがって、尚綱学院の教育は「からし種」に似ています。

学院長としての私の最大の目標は、これまで122年に渡って、地域社会の信頼を得て教育を行ってきた尚綱学院を発展的に持続させることです。教育の使命はそれを存続させることにあります。現代社会では、市場原理の貫徹とグローバル経済の進行が進み、それに伴い人々の経済格差はむしろ拡大しています。このような社会状況にあって、その学びによって、若い魂が希望を持ち続け、彼あるいは彼女が自律した個人として成長することができるような教育が益々必要になるでしょう。尚綱学院がそれに応える教育機関として持続できるように「教育環境」を整えるのが学院長としての私の役割です。

教育がなされるのはその「現場」においてです。学長、校長、園長を始めとした教育に直接かかわる人たちがその現場の主役です。彼らが個々の園児、生徒、学生を輝かせる教育をできるような環境の形成に、「黒子」としてその役割を最大限に果たしたい。すなわち、「からし種」がよく育つように畑を耕します。

2014年6月10日

学校法人尚綱学院
学院長 佐々木 公明

わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。

それは平和の計画であって、災いの計画ではない。

将来と希望を与えるものである。

エレミヤ書 / 29 章 11 節

そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。

ローマ人への手紙 / 05 章 05 節

今に生きる伝統

本学の前身、尚絅女学院短期大学の初代学長であるメリー D.ジェッシー宣教師は、短期大学創立記念式典の式辞の中で、尚絅の教育に対する自身の強い信念を述べています。尚絅はキリスト教主義の学校であり、キリスト教の原理に基づく教育の正しさを信じているが、それは教育の学問的水準の高さを軽んじているという意味ではない、とした上で、

「私たちは知的訓練以上のものが必要であること、本の知識以外のものが劣らず重要であると強く感じております。・・・人生を意味あらしめ価値あらしめるには、極めて強力な誠実な関心 中核 を持たなければなりません。その大きな中核とは「神」です。」

と述べています。

また、尚絅学院大学として初代の学長である渡部治雄先生は、「常に誠実であれ」ということを繰り返し述べられました。先生は、「ここまではわかるが、それ以上のことは今の自分の力ではわからない」ということをはっきり表明することを「知的誠実」と呼び、また「互いに尊敬しあう関係を作ろうと努力すること」を「人格的誠実」と呼び、これら二つの誠実さを身につけることを大学の目標とされました。

これらの精神は、今、本学にしっかりと根付いていることを感じます。これらの精神は、さらにたどっていけば、尚絅女学校の初代校長であるアニー・ブゼル宣教師の「グッドネス」の理念にまで遡ることができると思います。尚絅学院は、教職員、また学生・同窓生一丸となって、まさに神のご計画の内に幾多の試練を乗り越えてこられたとの思いを新たにします。キリスト教の精神に立つこのような一貫した思想と、長い伝統を引き継いで、優れた同僚や学生、同窓生や本学を支えて下さっている多くの関係者とともに働けますことは、私にとってこの上ない幸せであり、光栄に存じます。

私自身、本学の学長にお招きいただくことになることは、全く予想だにしておりませんでした。それもまた神様のご計画、と言うしか私には表現のしようがありません。就任以来2カ月余り、自らの至らなさを痛感するばかりですが、しかしもし私が招かれたことも、単なる偶然ではなく神様のご計画の一部なのであれば、それは決して失望に終わることはない、神様が必ず用いて下さる、それだけを心のよりどころに、日々努力しております。幸い、尚絅学院の伝統を受け継いだ、学生の利益のためなら骨身を惜しまない熱心な教職員や法人スタッフに支えられております。理事・評議員の皆様はもとより、同窓会、後援

会，尚学会，東北学院や宮城学院を始め在仙の教育機関や教会の関係者，さらには佐々木名取市長をはじめ地域の様々なお立場の方々など，多くの皆様のお力添えをいただきながら，私なりに精いっぱい努めたいと思っております。

将来と希望

さて，今日の社会経済や国際情勢，国内外の人口動態や近年の進学動向を見る時，我が国の大学の充実と改革が喫緊の重要課題であることに異論はないと思います。特に，大学教育への投資の収益率や，今後の人材需要予測などあらゆる指標が，知識基盤社会を支える人材供給の拡大を示唆しているにもかかわらず，高校卒業生の進学率自体が伸び悩んでいること，また外国人留学生数も伸び悩んでいることについては，その原因を注意深く分析し，今日本の大学が何をすべきかを考えてみる必要があります。

私は，これまで，主として国レベルの政策形成に関わってきました。しかし，つまるところ「事件は現場で起きている」のです。学生が，この大学に入って良かったと思える大学，この大学の一員であることを誇りに思える大学づくりが求められています。特に，身近な教育機会であり，知の拠点である地域の私立大学の今後の動向は，それぞれの地域はもちろん，高等教育システム全体の発展を図る上で重要なカギを握っています。

この点で，本学は大きなポテンシャルを持っていると考えています。この10年余り，本学は絶え間ない，厳しい改革の連続だったことと思います。その中で，建学の精神を受け継ぎ，学生と教職員の身近な距離感の中で，総合的な人間理解を目指して実践的な教育に取り組む，尚綱独自の大学文化を培ってこられた関係者の皆様に，心から敬意を表したいと思います。

もちろん，大学を取り巻く環境は厳しく，なお課題は山積していますが，これらに対して，さらに前向きに取り組もうとしています。来年度に予定している全学的なカリキュラム改革もその一つです。「生活環境学科」は，「あなたの描く未来」をキャッチフレーズに，「環境構想学科」として新しいスタートを切ります。環境構想学科では，地域環境，都市環境，生活環境の3つのコースを設け，自然と人とまちをつないで東北の未来をつくる人材育成を目指しておりますが，これに合わせて，他学科を含めたカリキュラムの全学的な刷新が予定されています。

今日の大学は，組織力が重要です。学生と直接接している教職員の創意工夫を大切にしていって，これからも「強力で誠実な中核」を持った卒業生を社会に送り出していけるように，歴代学長・学院長が築いてこられた方向性をまずはしっかりと引き継ぎつつ，学院全体の「発展的持続」の一翼を担ってまいりたいと願っております。ご支援，またご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。

2014年6月10日

尚綱学院大学
学長 合田 隆史